

LIBRA SQUARE

Cinema 心に残る映画

『評決』

1982年／アメリカ／シドニー・ルメット監督作品

法律家であるということ

私は、ほとんど映画を見てこなかったため、心に残る映画が極端に少ない。人生で最も映画を見た時期は司法試験受験時代で、木曜日、たまに自習室から帰り、テレビをつけたままぼーっとしていると、深夜番組で映画をやっているのを見ていたのだが、ここで、心に残った映画は、『フォーリングダウン』（1993年／アメリカ／ジョエル・シュマッカー監督作品）、『Uターン』（1998年／アメリカ／オリヴァー・ストーン監督作品）、そして、この『評決』である。

『評決』は、既に紹介されている可能性が高いし、『フォーリングダウン』や『Uターン』も優れた映画であると考えているので、個人的には、後者を紹介したいのだが、LIBRAという高尚な誌面にはふさわしくないと思い、私の視点で『評決』を紹介したい。

『評決』は、アルコール中毒の弁護士が、ある事件をきっかけに再び真実と正義を問いたずようになるまでを描く法廷映画。

ポール・ニューマン演じる主人公ギャルビンには、元は大手法律事務所のホープであったが、（確か）事務所所長の娘との離婚をきっかけに落ちぶれ、新聞の死亡欄から裁判になりそうな事件を見つけたのは、葬儀に紛れ込んで依頼を受けようとするまでに落魄した毎日を送っていた。そこに医療ミスで植物人間にされた患者の弁護の仕事がやってくる。はじめは金になりそうというだけで引き受けたが、調査を進める内に再び弁護士魂に火が点り、法廷に立ち上がる。

まず、ポール・ニューマンの演技には、とても心を打たれる。ギャルビンの人間としての弱さと法律家としての真摯さをうまく表している。

強大な力に立ち向かったとき、法律家として1人の弱い人間であり、プレッシャーに押しつぶされそうになる。主人公ギャルビンは、相手方代理人の様々な妨害、そして恋人の裏切

りに遭い、何度となく、くじけそうになる。人間の弱い部分を存分に見せる。そして、苦闘の末、ようやく手に入れた決定的証拠も証拠却下（だったか？）の決定を受ける（この法廷の裁判官もどこかで、相手方とつながっていたのでは？と思わずにはいられないのだが…）。

それでも、ギャルビンは陪審員に訴える。「今日は、あなたが法律だ」と。

強大な力の前では、市民は貧乏で無力である。しかし、法律の下では、平等である。正義と真実の下では、法律は正しい判断を下してくれる。もちろん、法律を適用するのは人間であるのだから、必ず間違いが生じる。しかし、この大前提があるから、どんな絶望の前でも、ギャルビンは、真実を求め、最後まで強大な力に立ち向かい、正義を訴えていくのだらう。まさに、これが法律家を支える精神ではないか。

ただし、私自身、1つだけ忘れてはいけないと思ったことがある。それは、ギャルビンには、この勝訴によって莫大な弁護報酬が入るが、医療過誤の被害者は、植物人間のままであり、被害者自身が救われるということはないことである。

ギャルビンは、和解金による解決を蹴り、真実と正義のためであると訴訟の道を選んでいるが、果たして、敗訴のリスクを考えたとき、被害者の家族にとって正しかったのか（映画では、勝訴したのであるから良かったのであるが）。所詮、法律家の仕事は、他人の人生にずけずけと入り込んでいく仕事ではないか。

正義を訴え、真実を求めるという法律家としての精神。しかし、これが奢りとなってしまってはならない。『評決』は、この微妙な問題を、私に考えさせてくれた映画である。

もっとも、普段は、『フォーリングダウン』や『Uターン』といった、ブラックユーモアだけの映画を見ているのであるが。

（会員 小堀 靖弘）

Book 最近, おもしろかった本

『嫌われ松子の一生』(上・下)

山田宗樹 著 幻冬舎文庫 上 600 円・下 630 円(税込)

法律書ばかりで硬くなった頭を ほぐすのに最適の1冊

先日、たまたま観た映画の予告編で本作品が映画化されたと知り、本屋で平積みされていた本書を手にとった。何気なく読み始めたのだが、次々と展開する松子の数奇な運命に引き込まれ、頁を繰るのももどかしく感じるほどだった。

物語は、松子の甥である笙が、亡くなった松子の遺品整理をするところから始まる。松子は、弟である笙の父とは長い間音信不通であったが、一人暮らしの狭いアパートの一室で、他殺体で発見された。大学生の笙は、次第に、一度も会ったことがなかった叔母松子の生涯に興味を抱くようになる。そして、松子の生前の知人に会って話を聞くうち、父から聞かされていた厄介者の松子とは違う人物像を抱きシンパシーを感じるようになる。

他方、物語は、松子の視点からも描かれ、美しい女教師から風俗嬢に転落し、殺人を犯してしまうなど、次々と不幸な運命が展開する。松子は、男運がなく、最後は殺人罪で服役

するに至るものの、実は真面目で純粋な心情の持ち主だった。

本書は、松子の生涯を、リアルタイムの松子と、これを追体験する笙という2人の視点から描いているが、その人生が悲惨であればあるほど、それを知った大学生の笙にとってインパクトが大きなものとなる。一見すると、ただの悲惨な一生だが、笙にとっては共感しうるものであり、意味のない人生などないと感じさせてくれ、また、そんな笙の存在は、松子にとっても最後の救いとなる。

作者の山田宗樹は、1998年に横溝正史賞を受賞した推理作家であるが、本書については、このようなメッセージが伝わってくる文学作品になっており、読み応えがあった。日ごろ、法律書ばかり読んでいて少し硬くなった頭をほぐすには最適の1冊と言っているのではないだろうか。

(会員 佐藤 篤志)

